

Title	フランス中世文学の写本と校訂法：ベディエの立場を廻って
Sub Title	Editions et Manuscripts, note sur la position de J. Bédier
Author	松原, 秀一(Matsubara, Hideichi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1963
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.16, (1963. 10) ,p.107- 121
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00160001-0107

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

フランス中世文学の写本と校訂法

—ベディエの立場を廻って—

松原秀一

校訂法史の概略

優れた中世学者であった父ポーラン・パリスの配慮に依って、ロマンス語学の建設者フリートリッヒ・ディーツの許に十七才で送られたガストン・パリスはボンとゲッティンゲンで二年を、当時一流の碩学テオドル・ミュラー、ベンファイ、クルティウス等に学び最新の知識を得て一八五九年に帰国した。三年後、古文書学院エコーラージュの卒業に提出した論文「フランス語に対するラテン語のアクセントについて」はフランスに於ける最初の近代的、体系的フランス語史の業績と云えるが、一八七二年に刊行された彼の「聖アレクシス伝」は、フランス中世文学作品の校訂に初めて、ラハマン校訂法を採用したもので、ジョゼフ・ベディエが、四十年後に反論を出すまで永く校訂本の模範となった。(註1)

ベディエの立場は一九一三年のS・A・T・F版「水鏡の歌」レドロンヌの序言で明らかにされ、一九二八年ロマニア誌に発表された彼のドン・カンタンの写本分類法批判で再び出張され現在まで数多の異論反論を惹起した。このベディエの発言が中世文学作品の校訂法に一大変

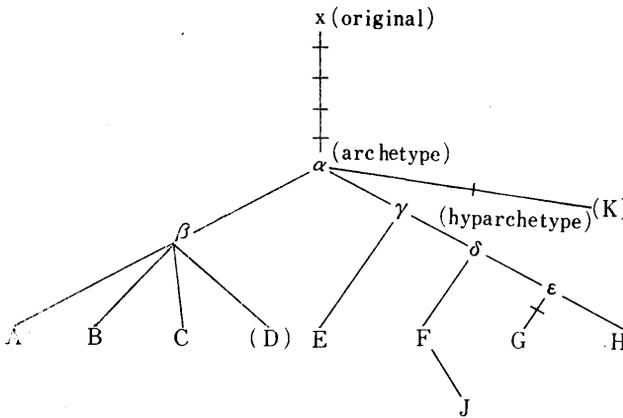
革を齎した事は云う迄もないが、彼の主張には、理論と實際の「水鏡の歌」の校訂の問題が絡んでいる為か、実際以上に極端に解釈されている様に思われる。彼の立場は、一九一三年から一九二八年に発表されたもので、^(註2)異論はあるものの大勢に於ては結論の出た問題と考える事が出来、彼の立論に寄与したマリオ・ロックを初めロマニア誌を中心とする学者には保持されている。

所が最近、歴史研究の方法論の概論と云える「歴史学とその方法」中に「本文校訂」を書いたロベール・マリシャルは、「三十年間の論争を振り返って見ると『ベディエのパラドックス』は、始めに考えられた程の重要性はないようだ」と云い「我々の資料は写本、結局ステマである。ステマが不条理だからと云って、それが示す証拠を捨て去る権理は我々にはない」と書いている。^(註3)これはベディエの立場への批判としては妥当と思われない。ベディエの主張は、写本は資料であっても、「ステマ」は解釈の一形態でしなないと云う事にあるので、ステマ其物を否定している訳ではないのである。ベディエの立場に対しては、写本分類の新武器として登場したドン・カンタンを始め、フルルケ、マースも批判を行い、最近は、カテテラーニ、ホワイトヘッド等の見解もベディエ説に全面的な同意をしているとは云えない。^(註4)これの多くは、ベディエに反してステマが二分岐になる事を正当化する努力と云えるが、ステマが二分岐か三分岐かと云う問題はベディエの主張の契機ではあるが、結論ではないのである。それではこの論議の出発点となったラハマン法とは何であるのか？ 以下簡単にこれを説明して、ベディエ説の主張と写本、校訂版の問題を考えてみたい。

一、ラハマン校訂法

ラハマンの校訂法とは、一八三〇年頃からドイツ中世文学作品の校訂、次で、古典文学の校訂に用いられた写本分類の方法であるがラハマン自身にはこの方法を解説する論文はないようである。ベディエも「カール・ラハマンによって案出されたと思われる通常の方法に従って」(Selon la méthode usuelle, inventée, semble-t-il bien, par Karl Lachmann) と云い、カステラーニも、ラハマン法と云われる方法 (méthode dite de Lachmann) と云っている。この方法をフランスで紹介したのはガストン・パリヌで「聖アレクシス伝」刊行以前一八六六年のルヴュ・クリティクに紹介したそうである。ガストン・パリヌの高等実習学院での「聖アレクシス伝」の講義は一八六八年(明治元年)からであるが、普仏戦争の為に七二年まで出版は延期された。この方法は、実際の作品校訂に於て全面的には採

用されなかったが、方法論としては、一般の賛同を得たと云う事が出来る。^(註5) ガストン・パリスの弟子であり師に愛されたベディエもこの方法に依り「水鏡の歌」を校訂し、トリスタン物語では失われた原作の複原を同様な方法で残った作品から試みたが、この体系を覆がえず反論に到達した事は、ファブリオ研究で、師の印度起原説を否定し、叙事詩論で師のカンティレーヌ学説に反論を出してベディエの仕事と考え合せ興味深いものがある。^(註6)



Paul MAAS: Textuel criticism Oxford 1958. P. 5.

間違いをしない」と考え方が有る。従って任意の二写本が同一の間違いを示す時は、一つの親写本から譲られたと考える。^(註7) ここにAからKまでの十写本があり分類の結果が、第一表の如くなつたとする。この図は何を表わし、又校訂本はどうして創るか？ 今これを簡単に説明しよう。DとKが括弧に入っているのは、この括弧をはずして三分枝以上の場合の例とするためである。^(註8) 系譜が二分枝になるか、三分枝になるかは、本文校訂の際、極めて重大な変化を齎らすのであって、ベディエの立論の根拠となつた事は既述の如くである。JがFから出ているのはJはFの誤りを全部含み、しかも、他のどの伝本にもない独自の異文を一つ以上示している。Jの写字生がFを写す途上で為した誤りとされる事を示す。このJ独自の異文は、「独自の誤文」と云われ狭義ではヴァリアントとは云わず、従ってラハマン法では註としても挙げなくてよいとされる。^(註9) GとHは互に共通でしかもAとFに無い誤りを含んでいるが、GH相互間に少くも一つ一つの「独自の異文」を含んでいる事になる。この場合、GとHに共通な部分は、残存していない。の示した本文となり、失れた。は再建出来る。GとHが異なる場合は、AとJのどれかと等しい方が。を伝えている事になるので、等しくない異文

は、狭義のヴァリアントではない。従って、GとHが異なりしかもA—Jのどれとも此の二者の示す文が等しくない場合のみ ϵ は求められない。この場合は、G・Hの示す異文は、ヴァリアントとして註に出す必要がある。即ち、単一の写本が、「誤り」を示すのでなく、他の写本又は写本群が共に異文を示すからである。

ϵ が復原出来たらこれとFとで δ が求められる。F・G・Hの等しい所が、 δ であり、FG対HならFGの方が正しく、FH対GならFHの方が正しい事になる。F対GHの時はこの二者の中ABCDE又、そのどれかと等しい方が正しい。この場合、FもGHも他のどの写本とも異なる時のみ δ は作れず、この時にFと ϵ がヴァリアントとなる。同様に δ とEで γ が復原出来る。 β はABCDの一致で復原され、もしこの四写本の中任意の二つが一致し他と異なる時は、 γ と等しいものが β を伝えていることになる。 β が再現不能なのはABCDが皆互に異なりしかも γ と異なる場合のみである。従ってA—Gの中同一の分枝に属するある写本が単独で示す「異文」は β 又 γ の復原には無価値であり、校訂本に示す必要もない事となる。

α は β と γ から再現されるが、この場合、 β と γ の対立する箇所は、第三のKがない限りは自動的には決定出来ず、両者の本文考証に依る他はない。このように、二分枝か三分枝かは重要な決手になる。以上の事を逆に考えると、 γ に異文があれば、それはE・F・J・H・Gの五写本に現われABCDよりも多くの写本に現われるが、この系譜が解っている場合は、原文は、科学的に決められる訳で十九世紀の文献学者にはこのラハマン法は貴重な方法であり、S・A・T・F叢書も原則としてこの方法を採用した。^(註9)但し繰返して注意すべき事は、ラハマン法では、写本の単一の異文は、原作の再現には無益と見られ採り上げられぬ事で、ヴァリアントとは、ここでは、異ったテキストではなく、二分枝間の対立する異文のみを指す事である。異文の比較検討によってステマが書かれてしまうと一見間違と思われるヴァリアントは陽の目を見られぬ立場に置かれ、然も、刊行された校訂本からは存在も推定出来ない。校訂本は「恐らく祖本にあった」テキストではあるがそれが「実際に中世に読まれた」テキストである写本よりも原作に近いと云う事は仮定の領域を出られない。ベディエ以後大きく変った点は、写本のテキストが、明に誤記等間違っていない限り、単一の写本の異文も尊重する可もとする点であらう。

二、ベディエの批判

ガストン・パリスに師事しハレ大学のズーヒャー(註10)に師事したジョゼフ・ベディエは一八九〇年に当時奉職していたフライブルグ大学から「水鏡レドジツルの歌」の校訂本を刊行した。(註11)この版では当然ベディエはラハマン方式の校訂をしている。この版は早速同年のロマニア誌に採りあげられガストン・パリスは細字七頁の書評をし、五写本を二分肢に分類したベディエにE写本が四三一行目から全く違うテクストを示す点に注意し、この写本は一写本で一分肢を構成するとした。即ち五写本を三分肢に分類す可きではないかと発言した。(註12)但しガストン・パリスは「ベディエ氏はABC対DEFの対立の例を引用し乍も、正しい直観によって殆んど全ての場合DEFを撰んでいる」とし出来上った結果としての校訂本は高く評価している。ベディエはこの後二十三年経て、同じ作品をS・A・T・F叢書の為に再び校訂するが、その時彼は、ガストン・パリスが指摘した五ヶ所の外に更に五ヶ所でDFのみの「異文」を認めた。所が、この事からガストン・パリスの指摘の様に三分肢に分類する事なく、この校訂法、特に伝本系譜の真实性を疑い、この校訂法そのものを覆がえしたのである。

ベディエの方向転換の出発点となったのは有名なベディエの発見、「伝本系譜は作品校訂の為に築く場合は大多数が二分肢となる」(註13)と云う事実の着目で、この点がマース、フルケ、カステルラーニ、マリシャル等の批判を齊らす所となった。ベディエの「水鏡の歌」の新版は一九一三年に出版されたが、F・ロトに依れば一九一一年には準備は終了していたと云う。一方ベディエ自身は、ラハマン法の新武器たるドン・カンタン法について、彼の立場を明らかにした一九二八年のロマニア誌での論文では、この発見は一九一二年か一九一三年と云っている。刊行された種々の作品の校訂版の写本系譜を調べたベディエは奇妙に二分肢の系譜が多い事に気付いた。不思議に思ったベディエはラテン語、英語イタリー語の作品六十程も調べたが二分肢の図が圧倒的に多かった。彼によると中世仏語の一一〇の校訂本中一〇五が二分肢になっていた。ベディエはこの事実は、写本の状態を現わすより寧ろ校訂者の心理から生れるのではないかと考えたが、此のベディエの解釈は心憎い洞察を示すものの反論を惹き起し誤解の種も播いたと云えよう。ベディエは写本系譜が二分肢になる事の是非より、写本が資料であるのに対しステマが解釈の一形態以外であり得ぬ点を重視したと思われる。この点はドン・カンタン法批判中に主張されているが、ドン・カンタン法はラテン訳聖書(ヴルガータ)の校訂法として写本間の依存関係を

知る為に案出されたものである。ドン・カンタンは、ラハマン法の「誤記」の観念を排除し、全く任意に適当な長さの部分を選び、三十から四〇位のヴァリアントのグループを採集する。但し、此処でも、単一の写本が他の全ての一致している所で示す異文は役立つ。(註14) ドン・カンタンは「水鏡の歌」の写本についてこの方法を試みているので、その例を第二表に掲げる。そして次にABCの三写本についてAがBCと対立するのは何回か、ABがCと対立するのは何回か、AとBとCが互に異なるのは何回かを数える。この時A \wedge B C=15、A \vee B \wedge C=7、A \wedge C=0のように一写本が他に對立する事が無い場合は、この対立を示さぬ写本(ここではC)が他の二写本の中間に在った事になる。又Cが極めて少い対立を示せば、少なくともABの親近性が立証される。但し、Cが中介者と云う事は、必ずしもC \wedge ABを示さず、A—C—B又はB—C—A、或いはA \vee CからN \wedge BC—A等を示す。マリシャルは、電子計算器を使えば三、四〇のヴァリアントでなく作品中のヴァリアント全部を調べ得ると云っている。實際この方法は、同一分肢に属する写本を推定するには有効であり、少なくとも「誤り」の観念から出発せずに操作出来る点、ラハマン法の不備を補うものと云えるが、写本相互間の親近性を知る段階から相互の依存関係を推定する所で、やはり仮説を排除出来ぬ点をベディエは指摘した。ベディエの帰納法的証明を見る為に、ドン・カンタンが「水鏡の歌」に自分の方法を適用した例を見よう。表二は、この作品の第一六六行から二三三行までに表われたヴァリアントを列挙したものの一部で、表三は三十のヴァリアントの示す写本間の異同の一部である。尚、B写本はA写本と殆んど同じテキストを示すので図三では考慮に入れられていない。第三表の1と12はCGの親近性を8、14、17はDEの親近性を示している。4はCFの近いこと7はGFの近い事を暗示している様であり、又3、5、6はAGD、AGEの無関係を表わしている。所が8、6ではDEが近い事となり、11、12、13ではCFが近いことになる。又15はFがCDの中間にある事を示す。Fは16ではCEの中間に18ではGDの19ではGEの中間になるので、これは図4の關係になる。一方CGとDEはそれぞれグループなのでこれは図5の關係を示す。こうした操作でドン・カンタンは第六表のCに示された系譜を書いた。

ベディエは、この系譜を先ず認め、この系譜に従い祖本の複原を試みた。三分肢であるので機械的に複原可能である。そして出来た祖本Wを現実存在すると仮定し、今度はWのテキストにEから五つのヴァリアントを撰んでRと云う写本を仮定する。要するに祖本Rを写し乍ら五ヶ所書きかえた写字生を仮定し、EとWの中間の写本を人工的に創って見た。もしドン・カンタン法が正しければ「水

第二表

1) se je sui	A B D E F	5) de tenir	A B C G
se j'estoie	C G	du tenir	D E F
2) m'amie	A B	6) amor	A B C G
amie	C G D E F	dame	D E F
3) mon cuers	A C G	7) ceste	A B E
mon cors	B	elle	C D F
mon mal	D E F	ore	G
4) solacier	A B	8) entor mon col	A B C G F
alasier	C G D E	entor le col	D E
alegier	F	9) puis que	A D E
		qant	C G F

(B manque)

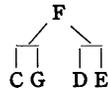
第三表

1) A/C G	20	A/C G	1	A C/G	0
2) A/C D	13	A/C D	3	A C/D	7
3) A/C E	12	A/C/E	6	A C/E	7
4) A/C F	14	A/C/F	2	A C/F	4
5) A/G D	11	A/G/D	3	A G/D	8
6) A/G E	11	A/G/E	5	A G/E	7
7) A/G F	12	A/G/F	2	A G/F	5
8) A/D E	21	A/D/E	2	A D/E	0
.....					
11) C/G D	0	C/G/D	1	C G/D	13
12) C/G E	0	C/G/E	1	C G/E	16
13) C/G F	0	C/G/F	1	C G/F	7
14) C/D E	13	C/D/E	0	C D/E	0
15) C/D F	6	C/D/F	4	C D/F	0
16) C/E F	7	C/E/F	6	C E/F	0
17) G/D E	14	G/D/E	0	G D/E	0
18) G/D F	7	G/D/F	4	G D/F	0
19) G/E F	8	G/E/F	5	G E/F	0
20) D/E F	0	D/E/F	2	D E/F	4

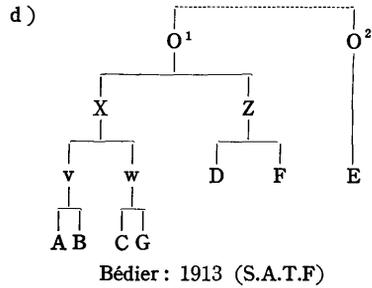
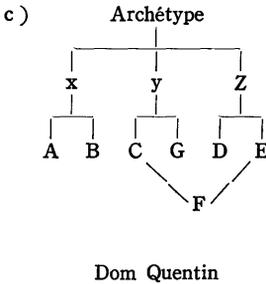
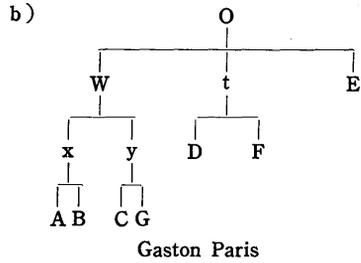
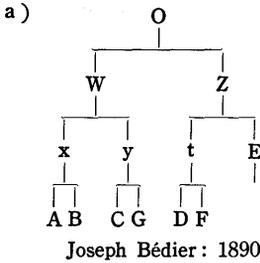
第四表



第五表



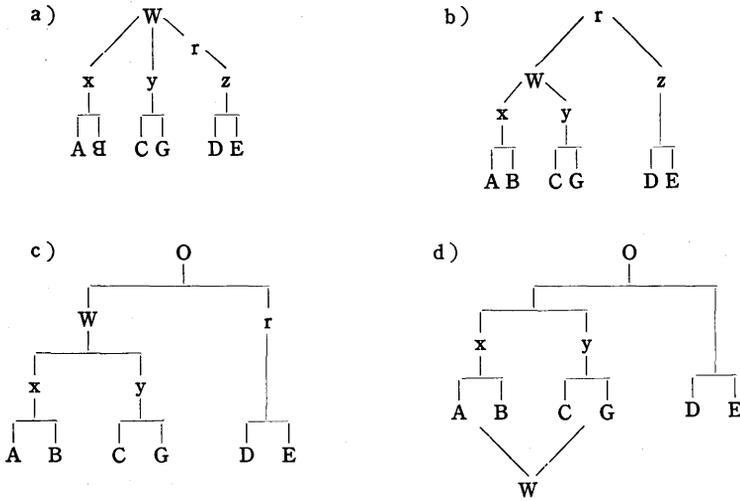
第六表 Stemmata du “Lai de l’Ombre”



鏡の歌」の写本五とこの新しく作り出した写本二をドン・カンタン法で再び分類する時第六表cの系譜に到達出来ねばならない。ベディエはそれを試みた。そして、第七表のaを先ず得た。これを第六表cと実質上は同じである。但し、この場合Wが祖本になるのは、Wが祖本である事を知っているからであり、知らなければ第七表bを得る事はあり得、又中世の写本を前にした時の如く失れた祖本を考えれば、ドン・カンタン法の結果からはcdも、又これ以上のステマも案出され得る。

ベディエはこの様にステマの浮動性を示したが、一方、第六表第七表を通じて不動の事実がある事も注意している。それは現存する写本間のグループの存在である。AB、CGの親近性は常に現われている。写本Eがドン・カンタン法によるか否かで異なる。ドン・カンタンはFをCGとDEの中間に置すが、ガストン・パリス又ベディエはDFをグループとした。一九一三年にベディエは、E写本の解釈として、これは原作者の改作を伝えるものと云う仮説を建てる事も出来るとした。S・A・T・F版ではベディエは「結局、私はこの写本の系譜を建てる事はしまいと思う。それは従来多くの研究者が種々の校訂版で示した系譜の多くと同程度に説得力のある系譜が建てにくいからと云うよりは、全く逆に、色々の系譜が極めて容易に考え

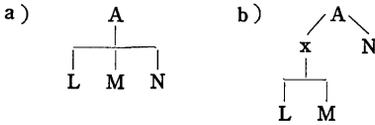
第七表



られ得るからである」^(註21)と云って、写本そのものは、丁度、建築物の基礎工事であってその上には何階の建物でも建てられるのであり、ステマは仮説を排除し得ぬ事実を指摘した。

そこで此の幻の祖本よりも、中世の人間、少くも二十世紀の我々より中世語に通じ、中世の感受性を持った人達が読んだ写本によって、特に中世に良い写本とされたものに依って作品を読み中世を現実捉えるために、一写本を底本に選び、出来る限りその本文を尊長する事を主張して、「水鏡の歌」^{レドロンツェ}では、まず S・A・T・F 版には、フランソワ一世の時から王室図書館にあった極めて良好な写本 B・N・f・f・八三七を底本として校訂し、一九二八年ロマニア誌上には写本 E を底本に「水鏡の歌」の校訂文を発表した。勿論この一写本を底本とする事は単に転写を以て事足りりとする事ではなく、例えば一九二八年の校訂でも、九六二行の作品中三六ヶ所は訂正を行っている。然し、その訂正は「写字生が読み返したら訂正したと思われる」誤記の訂正に止める^(註19)。この訂正を施された E 写本の校訂版は、この作品の中世に於る伝承の一つであり、原作ではないかもしれぬが、確かに中世に於て実在した作品の正しい一型態である。中世仏文学作品の現存の写本は十三世紀より、漸く多くなるのであって、仏文学創成時代である十二世紀から極めて距たっているとは云えぬ。今、残された写本のヴァリアントから複原される推定的原作が、正確に原作と一致する保証がない以上、良質の中世の写本に

第八表



従う方が、中世の現実に近いと云う事は充分に考えられる。この点、写本と作品の年代がずっと離れた古典語に関する学者としてのマース、マリシャル、又ドン・カンタンを考えると中世学者としてのベディエの立場は可成はつきり理解されよう。ベディエ批判を行つたフーケはマリオ・ロックの再批判を受入れた際、一九四九年のロマニアで、二分肢の多くなる原因を一つあげているが、これはベディエ説を支持する根拠となり得る。^(註16) 今、残存せぬA写本を独立に写した三写本、N、M、Nがあったとし、この中、例えば、Nが、Aの一ヶ所の誤り(又は誤文と思われたもの)を正したとすると、この事を知らぬ研究者は第八表bの様子に考えやすいと指摘している。これはラハマン法の弱点をよく表わす例である。我々が今誤植に気付くのは、必ずしも他の本との比較に依るのではなく、内容からも気付く。転写の場合は、独自に原本の誤りを訂正するものである。卑近な例を挙げれば、「失敗は成功の墓」とあれば、原文に当らず「墓」と直すであろう。この場合この成句を知らなければステマを考える時、誤っている祖本を伝本から出た物とする事は、起り得る。又作家はこの成句があり乍ら求めて「失敗は成功の墓」と云う事も有るかもしれない。十九世紀に漸やく始まった中世語の近代的研究は先ず、残された資料の再現が問題であり、写本自体が、充分に良い伝承を示す場合は、推論は補註にし、本文は写本に出来る限り従うベディエの立場は充分尊長される可きであろう。中世仏文学時代には、現代程のテクストに対する固定観は無かつたと思われる事は叙事詩に於る新伝承主義論争にも窺われるし、又写本で「独自の読み」を持たぬものは無くしかもどれもが「間違つた読み」とは云えない。ベディエの云う「作者に依る改作」も独断ではなく、例えば、クリスティヌ・ド・ピザンは在生中ベリ公とイザベル・ド・バヴィエールのために自作の写本をそれぞれ作らせたが、双方共に彼女の作品でしかも異同がある。「水鏡の歌」の場合、A写本とE写本の比較によって校訂本を作る事は、原形復原と云うよりAとJの写本に一つ写本を加える作業に近くなり、細心なる写字生になる事かもしれない。

ベディエの批判は、ステマの二分肢か三分肢かの議論になり、ステマに仮説を排除し得ぬ要素のある点は反論は出ていない。ベディエの注意する如く、ポル・メイエルもラハマン法で校訂を出さなかつた。一方、フアラルはベディエに批判的であつてヴァルルドワンの校訂ではラハマン法に依り、リュトブアの校訂では写本

が単一であっても相当訂正をしている。^(註17)

ベディエは一九二八年の論文では結局は校訂者の感受性と慎重さの問題であると云うがこれは実証主義としての原資料の尊重を一方に考へての発言であつて、決して写本の分類、厳密な批判検討を軽視したのではなく、あらゆる推論をした上で、資料を尊重する事を求めたのである、叙事詩研究、ファブリオ研究で彼の説が多くの補整を受ける段階にある時に、彼の校訂法の立場は最も批判に耐え得るものと思われる。

三、写本について

ベディエ論文の中で最も問題のあるのは、E写本を作者の改作とした仮定の大胆さにあると思われる。この仮説はドン・カンタン法に対しての便宜的仮説と思われるが「水鏡の歌」のE写本(B.N. Nouvelles acquisitions 1104)はマリ・ド・フランスのレエではS写本と云われる十三世紀の写本で十二世紀の一帖(十二頁)とその間の一葉(十三世紀)のラテン文を含む他はレエ・ブルトンしか含まぬ点極めて特殊な写本ではないかと思われる。レと呼ばれる短詩は、現在、中世仏語で約四十程しか残っていないが、この写本には、二十四が含まれ、その中にはマリ・ド・フランスの十二のレ中九を含んでいる。

レのジャンルについては種々問題もあるが、この写本の作品は皆中世にレと呼ばれたもの計りであり、インシピットにもエクスプリシットにも、レドブルターニユとはっきり書かれている。マリ・ド・フランスの作品は古ノルウェー語訳のストレングライカ写本を含めて五写本に残っているが、ハルレイ写本とストレングライカ写本は十二を伝えているものの、他のジャンルの作品も書かれているのに、このS写本のみはレしか含まない。この写本は、又フランシアンで書かれている事も特徴的で、エペネルがマリーの作品九を含むこの写本を利用しフランシアンによるマリ・ド・フランスのレの校訂版を出版したことは良く識^(註18)られている。この点、この写本は中世に、特にジャンルとしてのレ・ブルトンを意識して集めたものと考えられる事が出来る。ここで写本を扱う場合、個々のテクストのみでなく全体としての写本の質を問題にする必要を考えねばならない。スターティウスの「テーバイス」の写本についてフェリクス・グラはマドリッドに伝わる十一世紀の写本が優れた写本である事に注目し、この写本が、ローマから直接に伝来した写本を代々伝え、モール

人時代にも古典研究の中心であったトレードのカテドラルの所蔵であった事実を指摘^(註19)している。写本Sとハルレイ写本ストレングライカ写本に含まれるレ・ド・ランヴァルを校訂したリシュネルは中世仏語による四写本の全ヴァリアントを採集しドン・カンタン法の計算を試み、この作品についてハルレイ写本とS写本が共々に他の写本に対し古形を保っている事を明らかにした。リシュネルはS写本のみにある単独のヴァリアント百二十五中百十は意味上も「誤記」でなく正当化が出来るものとし、ハルレイの写本中の独自のヴァリアント百二十一中五十一のみが正当化可能なことから *Lectio difficilior* の原則に因ってハルレイ写本の方が意識的な訂正をしない保守的なテキストと考え優位をこの写本に与えている。計算の抽象は不注意による独自のヴァリアントと祖本中疑がわしい箇所を意味を通り易く意識的に改竄した事に依って生ずるヴァリアントを同一に扱う事になるので、個々のケースの本文批判によって決めるのである。リシュネルはH対CPSの場合はハルレイ写本を離れている。これに対しヴァルンケはHC対PSの場合はPSに從っている。リシュネル版では四写本の転写があるために独自のヴァリアントも解るが従来のマリ・ド・フランスの諸版によってはS写本の独自のヴァリアントの検索は困難であった。又「小鳥の歌」もこのS写本と「水鏡の歌」のA写本B写本に含まれるので、この写本の問題と極めて密接な関係があるが、ここでもS写本は独自のヴァリアントを出す点、特異な写本と云え又、作品中の「教訓」の順序から寧ろS写本を底本に撰ぶ事の正当性もあり得る事は、芸文前号の拙稿で論じた所である。このS写本が、レの選集として注意深く原型を撰んだと云う事も可能であり、少なくともこの仮定は「小鳥の歌」「水鏡の歌」については、可成の現実性が有り相である。従って、「水鏡の歌」についてS写本のテキストをジャン・ルナル自身に依る改訂版と考える事は、マリ・ド・フランスのレ、又「小鳥の歌」に見える同写本の同様な位置からみて余りにも冒険的仮説と云えよう。ベディエ論文では理論と「水鏡の歌」の問題は分離すべきものであったと思われる。S写本の問題は、この写本中の音韻、詩法等からの他写本との比較又、公文書学的研究によって解明されて行く可き物と思われる。

註1 Gaston Paris: *Etudes sur le rôle de l'accent latin dans la langue française*. Paris 1862. Gaston Paris にてこの書は *Bibliothèque de l'École des Chartes*. (1904) pp. 141-173. に *ギリス・クワロゼ* と略伝がある。Friedrich Diez と Gaston Paris 間の住復書簡は Adolf Tobler: *Vermechte Beiträge* (Reihe 5) pp. 443-474 に収録されている。前 Friedrich Diez: *Introduction à la grammaire des langues romanes* (Traduite de l'allemand par Gaston Paris 1863) に *ギリス* のつけた序文「ロトニア誌に収録されたディーツ百年祭のギリスの講演等参照」。

2 Joseph Bédier: *Le Lai de l'Ombre* par Jean Renart. S.A.T.F. 1913 (XIV-95 pp.)

- Joseph Bédier : La Tradition Manuscrite du Lai de l'Ombre, réflexions sur l'art d'éditer les anciens Textes. Champion 1929. (100 pp.) (Tiré à part de l'article paru dans la Romania 1928)
- Joseph Bédier : De l'édition princeps de la Chanson de Roland aux éditions les plus récentes ; nouvelles remarques sur l'art d'établir les anciens textes. Romania. 1937-1938 (en trois articles)
- 3 Robert Marichal : La Critique des textes. Dans *l'Histoire et ses Méthodes* (pp. 1247-1366) Encyclopédie de la Pléiade. Gallimard 1961. "Cependant, à la réflexion et à la lecture des controverses qui se sont poursuivies depuis trente ans sur ce qu' on a appelé le "paradoxe de Bédier", il apparaît qu'il n'a peut-être pas la portée qu'on lui a tout d'abord attribuée. (...) Notre seule source, ce sont les manuscrits eux-mêmes, donc, en dernière analyse, les stemma. Nous n'avons donc pas le droit de répudier témoignage sous le prétexte qu'il nous paraît absurde. (pp. 1284—1285)
- 4 Dom Quentin Essai de critique textuelle (Ecdotique) Paris, 1926.
- Jean Fourquet : Le Paradoxe de Bédier. dans *Mélanges 1945*, II. *Etudes littéraires*. (Publication de la Faculté des Lettres de l'Université de Strasbourg fasc. 105) pp. 1-16. Paris Belles Lettres 1946.
- compte-rendu de Mario Roques, dans "*Romanica*" Tome 69. (1946-1947) pp. 117-118.
- Paul Maas : Textual Criticism, translated from the german by Barbara Flower. Oxford Clarendon Press 1958 (Paul Maas : Textkritik 1957 Teubner. Leipzig. Le livre faisait partie de "Einführung in die Altertumswissenschaft" de Garcke-Norden 1927)
- Arrigo Castellani : Bédier avait-il raison ? la méthode de Lachmann dans les éditions de textes du Moyen Age. (Leçon inaugurale donnée à l'Université de Fribourg le 2 juin 1954) Editions Universitaires Fribourg 1957. 62 pp.
- Compte-rendu d' Ulban T. Holmes. Jr. dans *Speculum* 1958 p. 529.
- F. Whitehead : The Textual Criticism of the Chanson de Roland. an historical Review. dans *Studies in Medieval French, presented to Alfred Ewert*. Oxford Univ. Press 1961. pp. 76-89.
- 5 Paul Meyer : Instruction pour la publication des anciens textes Anciens Textes Français. (Année 1909) pp. 64-79. (reproduite dans la Bibliothèque de l'Ecole des Chartes. Tome 70. (1910) pp. 224-233.)
- 6 Joseph Bédier *ドゥーロワ* Ferdinand Lot : Joseph Bédier 1864-1938 Paris (1939) に詳しく。
- 7 誤読又は誤解に依るヴァリアントの場合は写字生は同一ヶ所での間違いを犯す事は却って起り得る。又原作を短縮する場合独立に同一の箇所を削除する事もある事である。

Gaston Paris "il n'est jamais permis à un éditeur d'imprimer des choses inintelligibles, ou il doit appeler sur les passages qu'il ne comprend pas et qu'il n'a pu restituer l'attention de ses lecteurs"

Paul Meyer "On n'est pas obligé de comprendre tout ce qu'on édite, mais on ne doit pas faire semblant de comprendre ce qu'on ne comprend pas."

16 Jean Fourquet : Fautes communes ou Innovations communes. dans "Romana" Tome 70 (1948-1949) pp. 85-95.

17 Edmond Faral : A propos de l'édition des textes anciens, le cas du manuscrit unique. dans Recueil de travaux offerts à Clovis

Brunel. Tome I (1955) pp. 409-421.

18 Jean Rychner Le Lai de Lanval. Droz. 1956.

19 Felix Gras : L'Histoire des Textes et Les Editions critique. Brblhotheque de l'Ecole des Chartes (1933) pp. 296-309. 彼の中譯は「
ト写本ヤの物の研究の必要性を認めたフランスでは一九三七年に Institut de Recherche et l'Histoire de Texte を設立された。

20 拙稿 Le Lai de l'oiselet 及び 中譯研究第十四・十五号。

21 Bref, nous renonçons à proposer un classement de nos manuscrits : non pas qu'il soit difficile d'en proposer un, aussi recevable que la plupart de ceux qu'ont employés en tant d'éditeurs tant de critiques, mais au contraire parce qu'il est trop facile d'en proposer plusieurs. J. Bédier "Le Lai de l'Ombre" (S. A. T. F.) p.XLI